

## 『邪馬台三国志』戦わずして勝った英雄列伝

倭奴国王朝六代女系天神の御代、即ち伊弉諾政権期の一八〇年代、東の副都を治める皇太子がオロチ族と組んで反乱し、邪馬台国を立てた。出雲の決戦で敗れた伊弉諾は本拠の熊襲に逃げ込んだ。百年後、日向から東征した磐余彦（神武）は、邪馬台国を倒し、大和朝廷を開いた。この間に、孫子の兵法極意「戦わずして勝つ」・「刃に血塗らずして敵を平伏させる」をみごと遂げた英雄たちの偉業を詳細に綴りました。

目次 ◇水穂（瑞穂）国 ◇邪馬台国はどこか

素戔嗚尊の大蛇（邪馬台国王、オロチの天照大神親子）退治

●倭国大乱 ●伊弉諾の南遷 ◇熊族／熊曾（熊襲）の遠祖 ●二人の天照大（御）神

●日神の出現 ●天石窟 ●オロチ退治

高皇産霊（天照大神の別名）の葦原中つ国平定

●天日槍襲来 ●忍穂耳と天孫饒速日の天降り ●葦原中つ国の平定

神功皇后の新羅遠征

●和王 磐余彦 ●仲哀の熊襲征伐 ●東征出發 ●筑紫国の奪還 ●新羅遠征

神武天皇（磐余彦）の「刃に血塗らずして」

●吉備と出雲の征伐 ●生駒の敗北 ●熊野上陸 ●日本に迫る ◇日前宮 ◇熊野三山

●日本の降伏

日本武尊の北伐

●橿原宮 ●日本武の北伐

◇「記紀」本来の筋書 ◇王朝の変遷 ◇倭国／倭奴国の国のかたち ◇本書の王系譜 ◇歴代ヒミコの墓／箸墓古墳の変遷

◇神武（磐余彦）と神功／海部氏系図 ◇神武天皇／神功皇后／日本武尊にまつわる伝説 ◇主な参考文献

☆尊称や敬語は省略 ☆記紀で食い違う王系譜については『古事記』を尊重し、人名の漢字は『日本書紀』によった。

☆孫子曰く、「百戦百勝は善の善なるものにあらず。戦わずして敵兵を屈服させるのが善の善なるものなり。故に、上兵は謀を伐つ。…」

〈百戦百勝したとしても、自国や自軍に損害をもたらすゆえ、最善とは言えない。敵と戦わずして、敵兵を屈服させるのが最善の策だ。戦う際の肝心なねらいどころは、敵国または敵軍のはかりごとを未然に砕き、敵の戦意を喪失させることにある〉

この時代の指導者らが競って不老不死の実現・魂の再来を狙った神国・常世づくり、古の善政再現に奮闘してきたことは、疑うべくもない。結果は大乱に陥って畿内・日向に二王朝が並立したが、双方ともに五帝期神国、周・呉・越・韓から渡来した末裔らが、神仙思想・儒教・仏教・バラモン教の良いとこどりをしつつ、新たな国のかたちを必死に模索してきた。

その中でも皆の切実な願いは、部族間のしきたりや宗教観の違いから多発する対立や争い事を一気に解決し、同じ価値観・同じ心の在り方・同じ生活の決まりを共有できる国につくり変えて天下泰平の世を叶えること、草創期の倭奴国王朝再現にあった。そのためにも、孫子の兵法極意「戦わずして勝つ」・「刃に血塗らずして敵を平伏させる」という戦法の実践が不可避だった。

このことは、素戔嗚尊の大蛇退治、高皇産霊の葦原中つ国平定、神功皇后の新羅遠征、日本武尊の北伐の説話からも、はっきりと見て取れる。

これを成し遂げる秘策は、十握劍、日矛、天叢雲劍（草薙劍）を敵に振りかざすことにあった。

天地あめつちの国体こくたいの下で、天の国と結束してきた出雲勢も、天日槍子孫の新羅勢も、邪馬台国から常陸や陸奥に追放された日高見勢（天火明一派）も、これらの祭器が眼の奥に焼き付いていた故、仰ぎ見て武器を投げ捨て、ひれ伏したのである。早く言うと、十握劍、日矛、天叢雲劍には、水戸黄門がかざした葵の印籠を遥かに凌ぐ神威が宿っているごとく、仕組まれていたのだ。